

## 国文学会ニュース

雑誌名	日本文学誌要
巻	14
ページ	63-63
発行年	1966-03-21
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10114/00019146">http://hdl.handle.net/10114/00019146</a>

▼特に法政大学にとって多難であった昭和40年度もようやく終ろうとしているが、昨夏以来の小田切教授の総長代行は、新総長決定が難航して依然継続しており、新理事が選ばれた四月末までは続きそうな状況である。生活のほとんどを犠牲にして総長代行の勤務にあたっておられる小田切教授の御苦勞はまことに頭の下がるものがあるが、日本文学科や国文学会にとっては影響するところが甚だ大きく、一日も早く小田切教授が学究生活に戻られる日が来ることを願わずにはいられない。

▼三月廿一日が卒業式で、日本文学科は約百七十名の卒業者を送り出す。六学科ある文学部の中でも点のからいことで定評のある日本文学科を無事に卒業できたことは、とにかくめでたい。五十人近い留年者が出ていることから、いわゆるトロテン式の卒業とは違うことが明白であろう。卒業生各位は、胸を張り、自信を持って社会へ出て、日本文学科で身につけたことを生かしていただきたい。

▼この春は、日本文学科の教授・講師陣に變動が多いので、左にお知らせしておきたい。

▼まず、重友毅教授が専任の地位を退かれ、後進に道を譲られることになった。先生は、昭和24年本学に御着任、長く二部日本文学科主任であられ、昭和33・34年度には文学部長の重責を負われるなど、本学に対する御功績が著しい。なお先生は明年度以後もひき続き講師として御出講くださるはずである。

▼昨春専任教授を辞された古田弘先生は、和光大学の学部長御就任が内定し、明年度からは御出講いただけないことになった。事あればヒサゴを携えて来られた先生を容易に見られなくなるだけでも淋しいことである。

▼昭和21年に高等師範部（旧制）に御出講以来、二十年にわたって講師として御協力いただいた猪野謙二先生は、神戸大学文学部長に御就任のため、明年度は講師を辞されることになった。時間の御都合がつくようになってから、再び御出講いただく予定である。

▼名誉教授西尾実先生は、大学院の講義のみ残し、明年度からは学部の講義にはお出にならないことになった。長い間御無理をお願いしていたのであり、先生の学部での多年の御尽力にお礼申し上げたい。

▼助手の駒尺喜美さんはこの三月で任期が終了する。三年間国文学会の事務局をあずかっ

てこられた御苦勞は、大変なものであった。深く感謝したい。

▼以上のように、教授陣容に大きな變動があるが、主任の近藤忠義教授を中心に、明年度以降についての計画が練られており、益田勝実講師の専任への移行、駒尺助手の講師就任等が既に内定し、近く正式に明年度の講義内容が決定するはずである。療養中の小原元教授も五月には御退院の予定と聞くから、明年度の日本文学科の陣容は、旧に勝るとも劣らぬ充実ぶりを示すものと思われる。

▼会員名簿の印刷が現在進行中であり、近く会員各位にお届けできるはずであるが、住所や勤務先の不明の方が意外に多い。變動が生じた場合には必ず国文学会事務局あて御連絡いただきたい。殊に新卒者の場合は、学生時代の下宿先がそのまま住所として登載され、郵便物が返送されてくることかしばしばなので、ぜひ連絡していただきたいものである。

▼法政大学国文学会は大正十五年に発足しており、本年十一月で満四十年になる。それを記念する行事が計画されており、秋頃に実施されるかと思われる。会員各位の御支援と御鞭撻を切にお願いしたい。

（表 章）